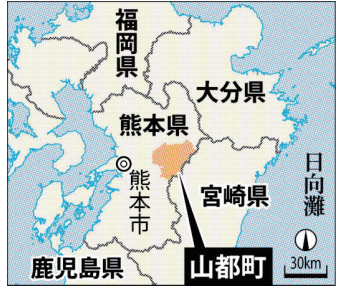




森と海からの手紙

★4便★



梅雨明け直後の、熊本県山都町。日本書紀に登場する神話「天孫降臨」の舞台となった宮崎県・高千穂峰に連なる山間地にある町である。その東竹原地区にある旧家で、栗屋克範さん(70)が、嘆息交じりに言った。

熊本・山都

神話の山に産廃処分場

考えることはできないでしょうが」

自然を育む家業に誇りを持って、林業一筋に400年続く栗屋家の12代目。「高祖父が手塩にかけて育てた木で建てたという屋敷の、黒光りする梁や柱が、築100年余の歳月を物語る。家の周囲には、樹高30メートルを超える樹齢400年ものケヤキやトチの太木がそびえている。一角には、守り神の「荒神様」が祭られ、代々、師走にはしめ縄を飾り、お神酒をささげて、清流で洗った石を積んできた。歳月を経て、それは縦横2段、高さ1段半ほどの石積みとなっている。



そこから数百メートルのところにある峡谷に、産業廃棄物処理場建設の話が持ち上がったのは、昨秋だった。水面下で用地買収が進んでいた。

谷から流れ出た川は五ヶ瀬川に合流し、天照大神が隠れたとされる「天岩戸」で知られる高千穂深谷を経て、日向灘に注ぐ。

熊本市内に本社を持つ産廃業者によると、「管理型最終処分場」と「中間処理施設」が建設され、東京ドーム4個分ほどの面積に、最大でドーム2・4個分の産業廃棄物を埋め立てる計画だ。埋め立て期間は30



樹齢400年のケヤキの大木を見上げる栗屋克範さん—いずれも熊本県山都町で

住民の総意なしに進む計画

60年。南海トラフ地震発生時の災害廃棄物の投棄も、視野に入れている。

今年5月には、住民説明会が行われ、町民ら約120人が出席。「地下水の汚染の心配はないのか」「(地震などで)有害物質が漏れないのか」などの懸念の声が上がった。

業者側は、土壌汚染防止用の遮水シートを設置し、廃棄物に触れた汚染水は、浄化施設を経て放流すると説明。今後、環境アセスメントが行われるが、遮水シートの耐久性は未知数だ。地区住民は今年1月、克範さんを代表に「東竹原産廃阻止期成会」を結成。地域には、「大自然をそのま

が薄いことです。沖縄基地問題や原発の問題もしており、『自分のところに関係なければ、しょうがない』という空気を感じます」ケヤキの木を見上げて、克範さんが頭を振った。



私が、初めて山都町を訪れたのは、2014年の初夏だった。「山都町に『日本国』という地名の一角がある。今では、イノシシのすみかになっている」。熊本に住む友人の話がきっかけだった。そこは、過疎と高齢化の波に洗われる典型的な中山間地だった。漂泊の俳人、種田山頭火の句「分け入っても分け入っても青い山」の舞台となった緑豊かな山々も、戦後の乱伐で荒廃。エサとなる広葉樹の減少も一因となって、シカやイノシシが里に下り、獣害の問題が深刻化している。

「田舎は公助の手当は薄かばってん、ここでは、共助や自助は当たり前。きれいな水と田畑がある限り、何が起ころうと、都会の人はどうろたえることはありません」



集落の顔役の岩田一昭さん(70)の言葉である。喜瀬のお籠りの翌日、町役場がある浜町の高台にある桑鶴社を訪ねた。雑草の生い茂る参道を上ると、樹齢300年の杉の大木の傍らに社があった。伝承によれば、決め事をす

「悲しいのは、町内でも、水系が異なる地域では関心も、年を重ねるほどに耕作放棄地が目立つようになって、残った田畑はことごとく、獣害よけの電気の柵に囲まれている。日本国のある島木地区の喜瀬集落を再訪したのは、7月1日だった。集落の守り神の御大師様が祭られている太子堂には、住民が集い、先祖代々「お籠り」を続けてきた。田植えや稲刈り、草刈りや普請作業から冠婚葬祭の手伝いまで、お籠りの席で住民の総意で決めてきた歴史がある。



太子堂のお籠りに集まった喜瀬集落の住民たち

住民の総意とは程遠く、産廃建設計画が進んでいる。【委員編集委員・萩尾信也】原則毎月第3火曜掲載